

第 12 回 諏訪二葉高校ロビーコンサート ～明治のピアノと大正のリードオルガンが奏でる響き～

秋冷の朝晩を迎えた 9 月 23 日、諏訪二葉高校玄関ロビーにおいて 12 回を迎えるロビーコンサートが行われました。

荒天の予報も出ていた当日、午前中は風も強く午後からは雨との情報もあったのですが・・・あにはかやんや、午後からは風もおさまり時折青空も覗くようになり、役員一同後顧の憂いなくコンサート開催の運びとなりました。

例年午前中から開催されていましたが、今回は午後からの開催といたしましたことも幸いし、開場時間も間近になると来賓の皆様をはじめ大勢のお客様が次々に来場されました。そして同窓会長、学校長のあいさつに続き、コンサートは音楽部の合唱で幕が上がりました。



本年度の NHK 合唱コンクールの課題曲でもある女声三部合唱「僕が僕を見ている」の晴れやかで瑞々しい歌声がロビーいっぱい広がってゆきます。生徒の皆さんの若々しい表情に、これから始まるコンサートへの期待が膨らむ一瞬でもありました。



続いては土橋綾子さん（高校 50 回生）のオルガン演奏です。一曲目は J.S.バッハの鍵盤曲“インベンション”。

オルガンの響きは暖かく柔らかく、巧みに弾き分けられた多声部に旋律が歌う演奏で、改めてオルガンと言う楽器の魅力に気づかされたひと時でした。演奏時、鍵盤上の指の運びに目が行きがちですが、目を転ずれば、絶えずペダルを踏んでいる足元に気が付きます。空気の振動で発音するオルガンですが、土橋さんの演奏はその音色も柔らかくまた暖かく耳に揺蕩うようでした。

「過ぎ去りし日々」「ハナミズキ」「いい日旅立ち」といった今回のプログラムも、オルガンの響きが似つかわしいものを、との思いから選曲してくださったとのこと、なるほどと納得した次第です。



休憩時間を経て、吹奏楽部の登場です。

今回は木管楽器での室内楽を、という同窓会からの勝手なリクエストを快く引き受けて下さり、クラリネット、フルート、サクソによるクラリネット四重奏、フルート三重奏、そして秋の童謡メドレーを楽しませていただきました。



木管楽器の響きは何故か秋に似合うように思います。オルガンと同じくリードの振動によって発音する木管楽器の音色が、暖かく懐かしく会場を包み込んでいきました。

そしてコンサートの最後、明治のピアノ演奏はマテー・千佐子さん（高校25回生）

椅子に腰を下ろしたマテーさんの指先からこぼれてきたのは、以外にもプログラムにはなかったベートーヴェンのピアノソナタ「月光」の第二楽章の数小節。このわずかな時間でふっと心が和み、木管からピアノへと耳が切り替わりました。



続いてはシューベルトの即興曲。ウィーンに留学経験のあるマテーさんにとってウィーン生まれ、ウィーン育ちのシューベルトには格別の想いがあると伺いました。

流れるような旋律で始まった即興曲、リリカルで歌うような演奏に一気に引き込まれます。そして「明治のピアノ」のチェンバロ機能を使ったヘンデル“調子のよい鍛冶屋”と続けました。もともとヘンデルがチェンバロのために作曲した組曲集の中の一曲です。チェンバロ機能をつかうことで、ピアノに比べ金属的な残響が印象的に残ります。

そしてショパンのノクターン、母校の校歌の作曲者でもある平井康三郎作曲の「さくらさくらの主題による変奏曲」。いずれも精緻な弱音から怒涛のフォルテと強弱がコントロールされた素晴らしい演奏でした。

休憩時間には歴代会長笠井嘉代子様より、コンサート前日の 22 日、茅野市の高原映画祭で上映された二葉生制作(昭和 32 年)の映画「夏休みのうた」の紹介をいただきました。昭和 30 年代という時代にあって、澆漓とした青春の息吹に満ちた映画作品を残された先輩たちに対しても明治のピアノの存在が、大きくまた豊かにその情緒を育てたのではないかと、ひそかに思った次第です。

今回のロビーコンサートの成功は、校長先生・教頭先生をはじめとする諸先生方、また PTA の皆様のご理解とご協力があって初めて可能になったことでした。

加えて今年は今まで二日かけていた準備を一日で終わらせるという予定でしたが、最初から最後まで破綻なく終わらせることができましたことに深く感謝いたします。 本当にありがとうございました。

武藤 記